

# 組織概要



- 名称  
きたみらい農業協同組合
- センター所在地  
北海道北見市中ノ島町1丁目1番8号
- 代表  
代表理事組合長 西川 孝範
- 出資金  
4,854百万円
- 組合員数  
8,054名  
(うち正組合員数 1,663名, うち准組合員数 6,391名)
- 組合員戸数  
985戸  
(温根湯68戸、留辺薬33戸、置戸86戸、訓子府275戸、相内74戸、上常呂103戸、北見161戸、端野185戸)
- 職員数  
380名(うち正職員数 263名)

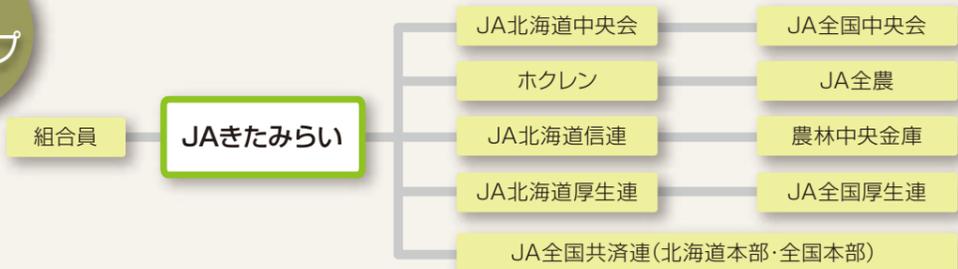
- 沿革
- 2003年 きたみらい農業協同組合発足  
(温根湯・留辺薬・置戸・訓子府・相内・上常呂・北見・端野)
- 2004年 豆類乾燥施設施工
- 2005年 生産履歴記帳管理システム導入
- 2006年 第2次地域農業振興方策並びに中期経営計画  
小麦乾燥調製貯蔵施設竣工  
玉葱貯蔵施設竣工
- 2009年 第3次地域農業振興方策並びに中期経営計画  
小麦乾燥調製貯蔵施設増設
- 2010年 哺育育成センター竣工
- 2012年 馬鈴しょ集出荷選別施設竣工
- 2014年 第4次地域農業振興方策並びに中期経営計画  
生産資材拠点センター竣工
- 2018年 玉ねぎ冷蔵貯蔵施設竣工
- 2019年 第5次地域農業振興方策並びに中期経営計画  
玉ねぎ集出荷施設竣工

## 働きやすい職場環境のために…ワークライフバランスの認定

北見市では、男性も女性も性別にかかわらず、仕事と家庭生活(子育て・介護・地域活動・自己啓発など)の両立支援や男女がともに「いきいき」と働きやすい職場環境づくりなどに積極的に取り組んでいる企業に対して「きたみワーク・ライフ・バランス認定事業所」の募集しております。その中でJAは最高評価である第3ステージに認定されました。



## JAグループ



## 機構図 令和元年5月



## きたみらい地区



# JAきたみらいの事業



JAの事業は農家組合員の営農サイクルに合わせた事業を展開しています。

## 営農指導事業

農家組合員が自主的に技術や農業経営など、営農に関わる内容や生活を改善するための協同活動を助言・支援する事業

### 営農振興部

- 行政等と連携した農業振興
- 補助事業等の実施業務
- 担い手支援
- 教育・広報活動

### 経営支援部・畜産部

- 「出向く営農」の実施
- 農畜産物栽培の技術指導
- 経営相談の実施
- 組合員窓口対応
- 総合的地域開発業務

## 販売事業

農家組合員が生産した農畜産物をJAが集荷し、付加価値をつけて販売するという事業

### 販売企画部・畜産部

- 作目別部会事務局
- 農畜産物の集出荷・選別・販売
- 販売戦略の構築・きたみらいブランドの確立
- 選果施設の管理
- 加工品の開発

## 購買事業

農業生産に必要な資材や生活物資を共同購入し、組合員によりよいものをより安く、安定的に供給する事業

### 購買部

- 「出向く購買」の実施
- 生産資材の安定供給
- 農業機械・車両の供給・修理
- ガソリン・灯油・軽油等燃料の供給

## 信用事業・共済事業

**信用事業** 組合員からの貯金を受入れし、これを組合員に貸し付ける相互金融によって、営農と生活の改善・向上をはかる事業

### 金融共済部

- 「出向く信用・共済推進」の実施
- 貯金の受入れ、引出しに係る窓口業務
- 融資の相談業務
- 共済契約者訪問活動
- 共済契約者の事故、入院等への対応
- 共済加入者の相談対応

**共済事業** 暮らしの相互保障活動として、暮らしに生じる不時の災害、組合員及び家族の高齢化や家屋等の老朽化などについて損害の補てんや蓄えとして長期的に暮らしの安定を図る事業

## 管理部門

経営管理、活力ある健全な職場づくり、職員教育等、組織を支え運営していくための活動を行う

### 総務企画部

- 年次計画・決算・財務に関する業務
- 中期経営計画・人事・労務に関する業務
- リスク管理・コンプライアンスに関する業務

## 監査部門

経営目標の効果的な達成に役立つことを目的として、内部管理体制が適切か評価し、問題点の改善方法について助言・支援を行う

### 監査室

- 監査の実施・内部統制の有効性評価
- 内部監査による情報収集と業務処理の効率化にむけた提案指導
- 不正・不当事件の未然防止

## 平成30年度 JAきたみらいの主な作目の作付面積、生産量、畜産物取扱高

部門	区分	品目	面積 (ha)	生産量 (t)
農産	水稲	うるち玄米	38.5	176.4
		もち玄米	711.7	3,419.9
	水稲計		750.2	3,596.3
	麦類	春小麦	1,284.8	5,195.1
		秋小麦	4,100.6	24,956.3
		大麦	—	—
	麦類計		5,385.4	30,151.4
	豆類	大豆	603.7	1,595.1
		小豆	204.7	515.4
		金時	10.2	12.7
虎豆		10.8	18.1	
大福		17.9	20.6	
白花豆		121.1	224.1	
紫花豆		55.9	82.6	
その他		24.1	69.0	
豆類計		1,043.4	2,537.6	
野菜	てん菜	3,486.8	180,309.6	
	そば	25.0	22.5	
	そ	20.5	0.5	
	薬草	1.0	2.6	
	農産計		10,712.3	216,620.5

部門	区分	品目	面積 (ha)	生産量 (t)
青果	玉ねぎ	玉ねぎ	4,622.0	265,949.2
		馬鈴芋	1,408.2	43,084.3
	馬鈴芋計		361.1	11,806.4
	しよ	加工用	470.6	17,010.2
		澱原用	3.1	135.8
	馬鈴芋計		2,243.0	72,036.7
	野菜	ほうれん草	3.0	34.0
		スイートコーン	402.0	4,504.6
		メロン	8.9	172.9
		白菜	20.6	1,374.9
人参		49.4	1,375.4	
レタス		1.1	37.3	
ごぼう		7.2	116.8	
長芋		4.5	50.4	
イチゴ		0.4	0.5	
かぼちゃ		47.6	463.6	
赤玉ねぎ	112.8	5,747.2		
アスパラ	2.4	7.8		
ペコロス	11.5	271.9		
その他青果物		193.6	4,625.1	
野菜計		865.0	18,782.4	
青果計		7,730.0	356,768.3	
農産・青果合計		18,442.3	573,388.8	

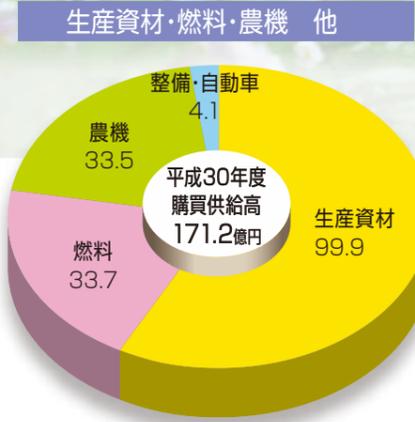
部門	区分	品目	数量 (t・頭)
畜産	乳牛	生乳 (t)	87,537
		育成牛	707
		初妊牛	876
		経産牛	397
		乳牛計 (頭)	1,980
肉牛	豚	初生トク	5,695
		素牛	2,563
		肥育牛	449
		廃用牛	1,440
		牛肉計 (頭)	10,147
その他	馬	豚	412
		馬	21
計 (頭)		433	

地域耕地面積(農産・青果・畜産)  
24,848.5 ha

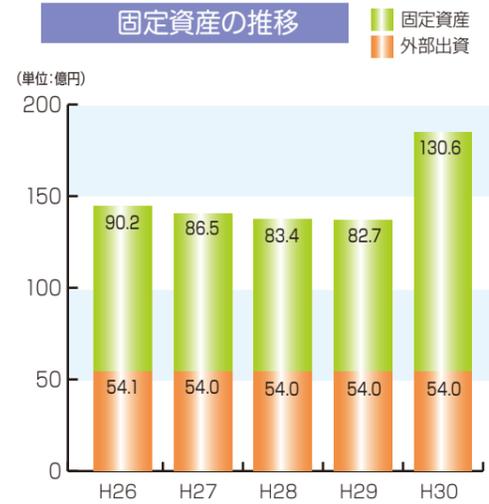
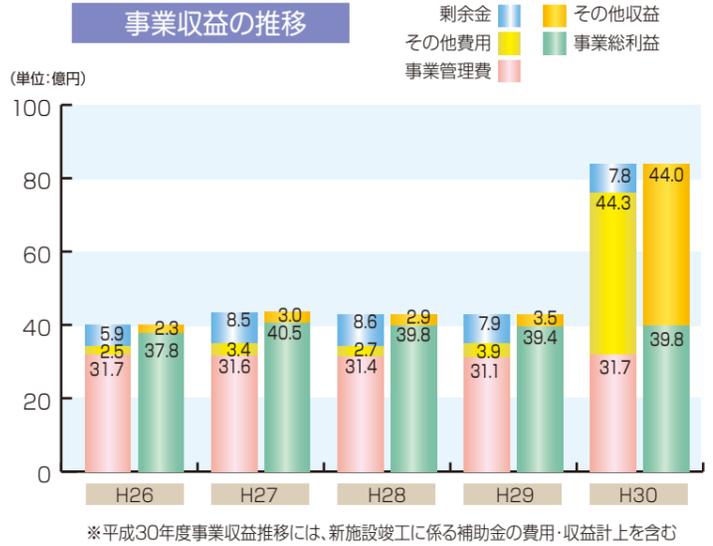
## JAきたみらいの農産・青果・畜産取扱高品目別構成



# JAきたみらいの事業



貯金	1097.8億円
借入金	5.6億円
貸出金	111.4億円
預金	971.9億円
短期受入共済掛金	8.4億円
長期共済保有高	2043.5億円
長期共済新契約高	176.4億円



## 単体自己資本比率の推移

年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
比率	25.01%	24.45%	26.22%	25.92%	24.27%

## 固定比率の推移

年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
比率	153.5%	166.6%	178.2%	182.8%	192.7%

(平成31年度1月末現在)



北海道大学大学院 農学研究院  
教授 坂下 明彦氏



JAきたみらいにとって2019年は次期の地域農業振興計画を策定し、次の5年間にに向けて動き出す年である。CSRレポートにも、継続に加えて新たな取り組みを見つけることができる。「力強い農業のために」農協がすべきことの柱のひとつが販売力の強化である。販売力の強化は、生産から流通、販売の過程で価値を生み出していく「バリューチェーンの構築」が不可欠だ。JAきたみらいでは、生産段階における組合員の「部会組織」と農協の営農指導と連携があるが、それにくわえて新たに整備した玉ねぎの集出荷選別施設は、昨年整備した貯蔵施設、さらには馬鈴しょの集出荷施設とあわせて、農協の主力品目のバリューチェーンをより強固なものとしている。また、販売において「マーケットイン」という、市場で何が売れるのか、ということを中心とした商品作りの発想に基づいて、加工商品の販売、インターネットの販売、さらには地元菓子店との連携といった新たな取り組みに積極的に取り組んでいる。こうした取り組みは、地域住民にとっても農協をより身近に感じることができる取り組みとして、農協のサポーターづくりにもつながるものと期待される。

JAきたみらいの代名詞ともなっている「出向くサポート」は営農指導から始まり今や他の事業にも適用されて、農協と組合員を繋ぐ欠かせない取り組みとなっている。組合員、地域をトータルにサポートすることができるという総合農協の強みを生かすためには、組合員と日常的にふれあい、寄り添うことが必要になる。大規模な合併農協としてスタートしたJAきたみらいが、組合員とのつながりをしっかりと構築しながら農協らしい事業を展開していることは、これからの北海道の農協にとっても貴重な経験を提供することになるであろう。

おわりに一点、今後のさらなる取り組みを期待したい分野として豊かで魅力ある地域(農村)づくりを上げたい。次世代の農業の担い手が地域で豊かに暮らしていくためには、農業だけではなく農村での暮らしを豊かにしていくことが不可欠である。きたみらい管内も人口の減少、高齢化が進み、地域の未来を描くことが難しい状況となっている地域もある。一方で、都市部には農業、農村に魅力を感じている人たちが増えてきている。JAきたみらいには、そうした人々を農村に呼び込み、地域、農業を共に創っていく仲間作りにも期待をしたい。

略歴 1977年(昭52)北海道大学農学部卒業  
1984年(昭59)北海道大学農学部助手  
1990年(平2)農学博士(北海道大学)  
1990年(平2)北海道大学助教授  
2003年(平15)北海道大学教授

主な著書 『北海道農業の構造変動と地帯構成』2006年 北大出版会(共著)  
『北海道の農地問題』1999年 筑波書房(共編著)  
『中国東北における家族経営の再生と農村組織化』1999年 御茶の水書房(共著)  
『大規模稲作地帯の農業再編』1994年 北大図書刊行会(共著)  
『中農層形成の論理と形態-北海道型産業組合の形成基盤』1992年 御茶の水書房